

黄帝内经 素问

一九九五・

島田 隆司 作成

重廣補註黃帝內經素問序

啓玄子王冰撰

夫釋縛脫艱全眞導氣拯黎元於仁壽濟羸劣以獲

安者非三聖道則不能致之矣孔安國序尚書曰伏羲

神農黃帝之謂之三墳言大道也斑固漢書藝文志曰

黃帝內經十八卷素問即其經之九卷也兼靈樞九卷

迺其數焉雖復年移代革而授學猶存懼非其人而時

有所隱故第七一卷師氏藏之今之奉行惟八卷爾然

而其文簡其意博其理奧其趣深天地之象分陰陽之

候列變化之由表死生之兆彰不謀而遐邇自同約而

(一) 重廣補註「黃帝內經素問」明嘉靖二十九年庚戌、武陵の顧從德、宋刻本を翻するに、この上に「重廣補註」の四字あり。森立之云「古抄本無、重廣補註」四字。元版同、此是初刻宋板之傳來、而可從矣。

(二) 脱艱 熊本「艱」作「難」。

(三) 其經之 熊本「其」下無「經之」。

(四) 八卷 森立之云「『漢志』所録尚未有缺。『隋志』“黃帝素問 八卷”、
『新唐志』“全元起注黃帝素問九卷”、九卷恐是八卷訛、全氏注本不可有九卷也。
晉・皇甫謐『甲乙經』云“『素問』九卷、二十九卷、即內經也、亦有所忘失”。
忘即亡訛。因攷、『素問』一經、魏晉已采非全卷、則『漢志』所云十八卷、亦未知
果全本否、恐是據篇目錄之歟。

重広補註黄帝内経素問序

啓玄子王冰撰

夫れ縛を釋き、艱を脱し、真を全くし、氣を導き、黎元を仁壽に拯い、羸劣を濟いて以て安きを獲る者は、三聖の道に非ざれば則ち之を致すこと能わず。孔安國、尚書に序して曰く、「伏羲、神農、黄帝の書は之を三墳と謂う。言は大道なり」と。斑固が漢書の藝文志に曰く、「黄帝内経十八卷、素問は即ち其の經の九卷なり、靈樞九卷を兼ねて、迺ち其の數なり」と。

復た年移り、代革ると雖も、而も授學は猶存す。其の人に非ざるを懼れて而して時に隠す所あり。故に第七の一巻は師氏が之を蔵し、今の奉行するは、惟八卷のみ。然り而して、其の文は簡に、其の意は博く、其の理は奥に、其の趣は深し。天地の象は分れ、陰陽の候は列れ、變化の由は表われ、死生の兆は彰らかなり。謀らずして遐邇は自ら同じく、約することなくして幽明は斯く契る。

① 王冰 新校正引『唐人物志』云「冰仕唐爲太僕令、年八十餘以壽終。」

② 釋縛脱艱 疾病の束縛と困難から解脱すること。

③ 黎元 「黎」は黒。黎民は黒髪の人。「元」は善、転じて人民のこと。

④ 仁壽 天然の寿命。

⑤ 拯 「救」と同じ。

⑥ 羸劣 体が瘦せ衰えて多病なこと。

⑦ 三聖 三皇と同じ。伏羲、神農、黄帝。

⑧ 孔安國 前漢、曲阜の人。武帝時の諫議大夫。孔子の第十二代目の子孫と言われる。

⑨ 尚書 『書經』西周時代から戦国時代まで書き継がれた中国最古の歴史書。漢初に伏生の口授した『書經』を漢代の隸書で書き留めた『今文尚書』があったが、武帝のとき古い文字で記した『古文尚書』が孔氏壁中から発見され、孔安國がそれを献上した。

⑩ 三墳 『左傳・昭公十二年』「是能讀三墳、五典、八索、九丘」、杜注「皆古書名」。

⑪ 斑固 後漢、安陵の人。斑彪の子、字孟堅、歴史家。AD三十二〜九十二年、『漢書』を著す。

⑫ 漢書藝文志 『漢書』十志の一。当時の典籍目録。

⑬ 靈樞 新校正云「詳、王氏此說、蓋本皇甫士安『甲乙經』之序、彼云へ『七略』、『藝文志』、『黄帝内経』十八卷、今有『鍼經』九卷、『素問』九卷、共十八卷、即『内経』也。」故王氏遵而用之。又『素問』外九卷、漢張仲景及西晉王叔和『脈經』只爲『九卷』、皇甫士安名爲『鍼經』、亦專名『九卷』。楊玄操云へ『黄帝内経』二帙、佚各九卷。按『隋書經籍志』謂之『九靈』、王冰名爲『靈樞』。

⑭ 師氏 『周礼』によれば地官の属官。官吏の子弟の教育を担当する官。

⑮ 奉行 「奉」はたてまつる、「行」は流行する。

⑯ 天地之象 天の星宿、地の物象。

⑰ 遐邇 「遐」は遠、「邇」は近。

幽明斯契稽其言有徵驗之事不忒誠可謂至道之宗

奉生之始矣假若天機迅發妙識玄通蔽謀雖屬乎生

知標格亦資於詁訓未嘗有行不由逕出不由戶者也

然刻意研精探微索隱或識契真要則目牛無全故動

則有成猶鬼神幽贊而命世奇傑時時出焉則周有

秦公漢有淳于公魏有張公華公皆得斯妙道者也咸

日新其用大濟蒸人華葉遞榮聲實相副蓋教之著矣

亦天之假也冰弱齡慕道夙好養生幸遇真經式爲龜

鏡而世本紕繆篇目重疊前後不倫文義懸隔施行不

易披會亦難歲月既淹襲以成弊或一篇重出別立二

(二) 奉生 與本「奉」作「養」。

其の言を稽えるに徴しあり。之を事に驗すに忒わず、誠に至道の宗、生を奉ずるの始と謂うべきなり。

假えば天機迅發にして、妙識玄通するが若し。蔽謀は生知に屬すると雖も、標格は亦詰訓に資する。未だ嘗て行くに逕に由らず、出るに戸に由らざる者あらざるなり。

然り、意を刻し、精を研ぎ、微を探り、隠れたるを索め、或は真要を識契するときは、則ち牛を目して全きなし。

故に動ずれば則ち成ることあり。猶、鬼神の幽かに賛し、而して命世奇傑の時々に間して出るがごとし。則ち周に秦公有り、漢に淳于公有り、魏に張公華公有り、皆、斯の妙道を得たる者なり。咸、日に其の用を新たにし、大いに蒸人を濟う。華葉は遞いに榮え、聲實相い副う。蓋し、教えの著しきなり。亦天の假なり。

冰は弱齡より道を慕い、夙に養生を好む。幸いに真經に遇い、式つて龜鏡と爲す。而るに世本は紕繆し、篇目は重疊す。前後は倫せず、文義は懸隔す。施行は易からず、披會も亦難し。歲月は既に淹い、襲うて以て弊を成す。或は一篇の重ねて出でて、別に二名を立つ。或は兩

① 忒 「忒」は七十心、弋は代と同系の言葉で、思うことが食い違ふこと。

② 天機 天賦の資質。『莊子』に「其嗜欲深者、其天機淺」と言う。

③ 蔽謀 「蔽」は完全に備わっていること。「謀」は認識。

④ 標格 優れて高い品格、学識。

⑤ 詰訓 古文の字句の意味を解説すること。

⑥ 目無牛全 「目無全牛」と同じ。熟練の域に達していること。

⑦ 贊 助力する。

⑧ 命世 「名世」と同じ。名が世に聞こえること。

⑨ 秦公 戦国時代の名医・秦越人。即ち扁鵲。秦越人は『史記・扁鵲倉公列傳』に見える。また新校正云「按別本一作和緩。和緩、即春秋秦医学家和、医緩の合称。医和見『春秋・昭元年左傳』、医緩見『春秋・成十年左傳』」。

⑩ 淳于公 即ち『史記・倉公列傳』の倉公淳于意、前漢の名医。

⑪ 張公 即ち張機。後漢の名医、字仲景（AD150-220）。著書に『傷寒論雜病論』有り、かつて散逸し、世に伝わる『傷寒論』、『金匱要略』は即ち該書である。

⑫ 華公 華佗、後漢の名医（AD208）。

⑬ 蒸人 「蒸」は「烝」「衆」に通ず。衆人、庶民。

⑭ 弱齡 『礼記・曲礼』二十を弱と言う。

⑮ 龜鏡 龜鑑と同じ、手本。

⑯ 倫類

⑰ 或一篇重出而別立二名 『離合眞邪論』、新校正云「按全元起本在第一卷、名『經合』。第二卷重出、名『眞邪論』」。

名或兩論併吞都爲一目或問答未已別樹篇題或脫簡不書而云世闕重合經而冠鍼服併方宜而爲效篇隔虛實而爲逆從合經絡而爲論要節皮部爲經絡退至教以先鍼諸如此流不可勝數且將升岱嶽非逕奚爲欲詣扶桑無舟莫適乃精勤博訪而并有其人歷十二年方臻理要詢謀得失深逐夙心時於先生郭子齋堂受得先師張公秘本文字昭晰義理環周一以參詳群疑水釋恐散於末學絕彼師資因而撰註用傳不朽兼舊藏之卷合八十一篇二十四卷勒成一部冀乎究尾明首尋註會經開發童蒙宣揚至理而已其中簡脫

(一) 合經 守校本作「經合」
 (二) 鍼服 『素問校注』作「鍼經」
 (三) 經絡 伊澤栢軒信道曰「絡恐終誤，蓋『玉版論要』與『診要經終』舊合併爲一篇歟」。

- ① 或兩論併合而都爲一目 『血氣形志篇』、新校正云「按全元起本、此篇併在前篇、王氏分出爲別篇」。
- ② 或問答未已、別樹篇題 『著至教論』、「雷公曰、陰陽不別、……」新校正云「按、自此至篇末、全元起本別爲一篇、名『方盛衰』也」(232b)。又「陰陽類論」「雷公復問、黃帝曰、在經論中」、新校正云「按、全元起本、自雷公以下、別爲一篇、名『四時病類』」(244a)。此皆問答未已而別樹篇題。
- ③ 或脫簡不書、而云世闕 『逆調論』篇末、王注「三義悉闕而未論、亦古之脫簡也」(913a)。又「六節藏象論」新校正云「詳、前岐伯對曰昭乎哉問也至此、全元起本及『太素』並無、疑王氏之所補也」(377a)。又、森立之云「王氏曰、〈第七卷、師氏藏之、今奉行、惟八卷爾〉則所云脫簡者、謂第七一卷也」。
- ④ 重「經合」而冠「鍼服」 顧觀光『素問校勘記』云「『經合』原作『合經』。按『離合眞邪論』篇題下、新校正云「全元起本在第一卷名『經合』、第二卷重出、名『眞邪論』」。本書無『鍼服篇』、惟「八正神明論」首有用鍼之服句。全本在第一卷、蓋在『眞邪論』前、而『眞邪論』則「經合篇」之重出者、故云然」。
- ⑤ 并「方宜」而爲「效論」 森立之云「按『異法方宜論』舊併合『效論』末歟」。
- ⑥ 隔「虛實」而爲「逆從」 劉衡如云「『四時逆從論』新校正云「按厥陰有余至筋急目痛、全元起本在第六卷。春氣在經脈至篇末、全元起本第一卷」(187b)。三陰三陽有餘爲實、不足爲虛。王冰認爲全元起本不應將「三陰三陽之虛實」遠隔在第六卷、而將『四時逆從論』列入第一卷中」。

論併吞して、都めて一目と爲す。或は問答未だ已わらざるに、別に篇題を樹て、或は脱簡を書かずして、世、闕たりと言う。合經を重ねて鍼服を冠す。方宜を併せて效篇と爲し、虚實を隔てて逆從と爲す。經絡を合して論要と爲し、皮部を節して經絡と爲す。至教を退けて以て鍼を先にす。諸の此の如き流れは勝けて數うべからず。且つ、將に岱嶽に升らんとするに、逕に非ざれば奚より爲す。扶桑に詣でんと欲すれば、舟なくして適くことなし。乃ち精しく勤め、博く訪ねて、而も并びに其の人有り。十二年を歴して、方に理要に臻る。詢いて得失を謀るに、深く夙心に逐う。時に先生、郭子の齋堂に於いて先師張公の秘本を受得す。文字は昭晰にして義理は環周す。一たび以て參詳すれば、群疑は氷釋す。末學に散じ、彼の師資を絶やさんことを恐れる。因つて撰註して、用いて不朽に傳う。舊藏の卷を兼ねて、合して八十一篇、二十四卷、勒して一部と成す。冀くば、尾を究め、首を明らかにし、註を尋ね經を會し、童蒙を開發し、至理を宣揚して已まん。

⑦ 合「經絡」而爲「論要」 『經絡』當作「經終」。伊沢柏軒云「絡恐終誤、蓋『玉版論要』與『診要經終』、舊合併爲一篇歟」。劉衡如云「絡當作終、論當作診、形近而誤。『玉版論』論當作診。要」篇末「論要畢矣」、「大素」卷十五「色脈診」作「診要畢矣」。次篇（本與上篇相連）「診要經終」篇首「黃帝問曰、診要何如」據此、既可證明『玉版論要篇』爲『玉版診要篇』之誤。而且「合『經終』而爲『論要』」一語、可不煩注釋而自明。

⑧ 節「皮部」爲「經絡」 『經絡論』新校正云「按全元起本在『皮部論』末、王氏分」

⑨ 退「至教」以先「鍼」 森立之云「案、開卷第一、退治病至教、而先鍼法末技之謂歟。全元起本『平人氣象論』在第一卷、『上古天真論』在第九卷」。

⑩ 岱嶽 泰山の別稱、中國五嶽の一。

⑪ 扶桑 神話中に「日出づる地方を扶桑」と言う。仙人の居る所。

⑫ 歷十二年 王冰が次注本を撰述し終わったのが唐宝応元年（紀元662年）であり、従つて12年前の752年に王冰は『素問』の卷篇の重篇と注釈を始めて居る。この12年間には、唐代には「安史之乱」（755-763年）が発生しこれ以後、唐朝は衰退に向かつて居る。

⑬ 方臻理要 「臻」、至るなり。「理」、理會、了解なり。

⑭ 詢謀得失、深遂夙心 「夙心」初心。自己の宿願を遂げる爲に、得失を考ふる。

⑮ 郭氏齋堂 郭公の書房。「子」尊称。

⑯ 先師張公 一説に張文仲を指すと。文仲は唐代の武則天の初年時の侍御医、

⑰ 隨時備急方」を編纂して世に行われている。

⑱ 末學 枝葉末節の學問。

⑲ 舊藏之卷、今竊疑之」 『素問』第七一卷亡失久。全元起本亦無此卷。而冰自謂得舊藏之卷、今竊疑之」。

⑳ 童蒙 『釋名・釋言語』「勒、刻也。刻、識也」。文章を右に刻みこむこと。

文斷義不相接者搜求經論所有遷移以補其處篇目
墜缺指事不明者量其意趣加字以昭其義篇論併吞
義不相涉闕漏名目者區分事類別目以冠篇首君臣
請問禮儀乖失者考校尊卑增益以光其意錯簡碎文
前後重疊者詳其指趣削去繁雜以存其要辭理秘密
難粗論述者別撰玄珠以陳其道凡所加字皆朱書其
文使今古必分字不雜糅庶厥昭彰聖旨敷暢玄言有
如列宿高懸奎張不亂深泉淨滢鱗介咸分君臣無夭
枉之期夷夏有延齡之望俾工徒勿誤學者惟明至道
流行徽音累屬千載之後方知大聖之慈惠無窮時大

其の中の簡脱し、文斷ち、義の相い接せざる者は、經論を搜し求め、遷移して以て其の處を補う所あり。篇目の墜缺して、指事の明らかならざる者は、其の意趣を量り、字を加えて以て其の義を昭らかにす。篇論併吞し、義の相い涉らず、名目を闕漏する者は、事類を區分し、目を別ちて以て篇首に冠す。君臣の請問の禮儀を乖失する者は、尊卑を考校し、増益して以て其の意を光らかにす。錯簡碎文し、前後重疊する者は、其の指趣を詳かにし、繁雜を削去し、以て其の要を存す。辭理秘密にして粗ば論述し難き者は、別に玄珠を撰し、以て其の道を陳ぶ。凡そ加うる所の字は、皆其の文を朱書す。今古をして必ず分ち、字をして雜糅ならざらしむ。

庶くば、厥の聖旨を昭彰し、玄言を敷暢すること、列宿の高く懸りて、奎張の亂れず、深泉淨澁して鱗介は咸分れるが如くあらん。君臣は天柱の期なく、夷夏は延齡の望あり、工徒をして誤ること勿らしめ、學者は惟だ明らかにかに、至道は流行し、徽音は累屬し、千載の後に方に大聖の慈惠の窮まりなきを知らん。

- ① 玄珠 新校正云「詳、王氏『玄珠』、世無傳者。今有『玄珠』十卷、『昭明隱旨』三卷、蓋後人付託之文也。雖非王氏之書、亦於『素問』第十九卷至二十二卷頗有益明」。
- ② 朱書其文 昌美云「如『刺腰痛論』〈引脊内廉、刺足少陰〉。下注云〈從腰痛上寒不可顧至此件經語、除注並合朱書〉。新校正云「此段文字按全元起本及『甲乙經』并『太素』、自腰痛上寒至此并無、乃王氏所添也」。
- ③ 雜糅 入り交じる。
- ④ 玄言 奥深い言葉。
- ⑤ 敷暢 敷衍と同じ。意味を押し広げて説明すること。
- ⑥ 列宿 空に連なつて居る星宿。
- ⑦ 奎張 奎宿と張宿。二十八宿中の星名を指す。
- ⑧ 淨澁 「淨」は清い。「澁」は水が澄んでいる様。
- ⑨ 鱗介咸分 「鱗介」は魚類と貝類。魚類と貝類とがはっきりと分かれて居ること。各種の事物がみな良く区分されて居ること。
- ⑩ 天柱 天折と同じ。短命に亡くなること。
- ⑪ 夷夏 「夷」は東方の異民族。「夏」は中国の人。
- ⑫ 工徒 ここでは医者を指して言う。
- ⑬ 徽音累屬 「徽」は美也。徽音とは佳音。「累屬」連続して断たれない。

唐寶應元年歲次壬寅序

將仕郎守殿中丞孫 兆 重改誤

朝奉郎守國博士同校正醫書上騎都尉

賜緋魚袋 高保衡

朝奉郎守尚書屯田郎中同校正醫書騎都尉

賜緋魚袋 孫 奇

朝散大夫光祿卿直秘閣判登聞檢院上護軍

林 億

時に大唐寶應元年。歲、壬寅に次るに序す。

① 寶應元年 紀元762年。「宝応」唐代の宗の年号。
② 歲 木犀。

將仕郎守殿中丞孫 兆 重改誤

朝奉郎守國博士同校正醫書上騎都尉賜緋魚袋 高保衡

朝奉郎守尚書屯田郎中同校正醫書騎都尉賜緋魚袋孫 奇

朝散大夫光祿卿直秘閣判登聞檢院上護軍 林 億